



## 第3章

### 春日部市の歴史文化の特徴

---

## 第3章 春日部市の歴史文化の特徴

### 第1節 歴史文化の概要

第1章において本市の概要、第2章では本市の文化遺産の概要と特徴について概観してきました。本市は、市域の約90%が中川低地に位置しているため、起伏が少なく平坦な地形であることが特徴となっています。

旧石器時代には、寒冷化の影響により海水面が低下し、東京湾の海岸線は浦賀水道付近まで後退していたと考えられており、市域の中央には深さが30m以上にもおよぶ峡谷が刻まれていました。坊荒句遺跡や風早遺跡などで旧石器時代の人々の生活の痕跡が確認されていますが、市域では石器に適した石材が入手できなかったようで、栃木県や長野県、神津島など関東周辺の産地から石材を入手していたことがわかっています。縄文時代になると、温暖化に伴い海水面が上昇し、峡谷であったところに奥東京湾と呼ばれる海が形成され、市域は大宮台地や下総台地を除き、海の底になっていました。市域の縄文時代の人々の生活の痕跡は、これらローム台地上で確認されていますが、約6,000年前には花積貝塚や米島貝塚などで、海岸線が後退した約3,800年前にも神明貝塚のような大規模な貝塚が築かれていることから、眼前の水産資源などを上手に活用していたことがわかります。その後、海岸線が後退し、海であったところは河川がもたらした土砂によって埋め立てられ、現在の中川低地ができあがりました。市域で弥生時代の人々の生活の痕跡が確認できた事例はわずかですが、須釜遺跡から出土した土器にみられる粃の痕跡から稲作が行われていたことがわかっています。

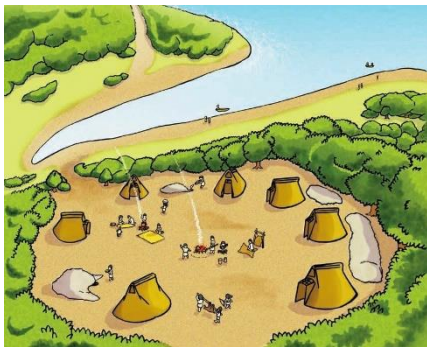
その後、古墳時代後期の6世紀代になると、低地において集落が形成され、しかも大規模化する傾向にあることから、この頃までには、水が得やすく肥沃な土壤が広がる低地が、生活の場として安定して利用されるようになったことが推察できます。しかしながら、小淵山下北遺跡で発掘された平安時代の住居跡のように、洪水土砂で埋もれてしまったものや水の流れによって壊されたものがあることから、当時の人々にとって、河川は恩恵をもたらす存在であったとともに、ひとたび氾濫すれば自分たちの生活を破壊する強大な自然の力として畏怖の対象でもあったと考えられます。なお、古墳時代以降、現代に至るまで、河川は地域や国の境界を示すものとなり、市域は一貫して武蔵地域と下総地域の境に位置することとなりました。

平安時代の末頃から中世にかけて、市域には太田荘と下河辺荘と呼ばれる荘園が広がっていたことから、低地の開発がさらに進められたものと推察されます。この低地を基盤として活躍したのが、古文書などにその名がみられ、浜川戸遺跡が居館跡とされる鎌倉時代・南北朝時代の春日部氏、戦国時代の土豪武士であった多田氏や関根氏、井上氏などと考えられます。なお、備後須賀稻荷神社に残されている伝承には「須賀の土地は海中の小島」という一節があり、誇張の表現もあるでしょうが、自然堤防などの微高地を除き、低地は湛水が著しい場所であったことを示しているのかもしれませんが。

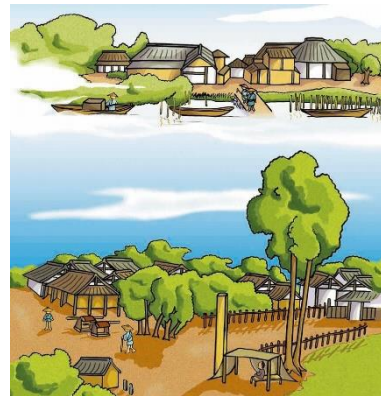
近世になると、江戸との結びつきの中で、本市は日光道中の粕壁宿、江戸川の西宝珠花

河岸<sup>かし</sup>といった陸上及び水上交通の要衝として発展していきます。街道や河川を利用して多様な物資や人物が往来し、『おくのほそ道』を著した松尾芭蕉や、生涯に約12万体の仏像を彫ったといわれる円空、近代にはイギリス人旅行家で『日本奥地紀行』を著したイザベラ・バードなども市域を訪れています。また、江戸川の開削などの河川整備に伴って用悪水路の整備が進んだ低地では、新田開発により多くの村落が生まれました。現在の市域にみられる、商業地域の周辺に豊かな田園地帯が広がる景観の基盤が、この頃に成立したといえます。近世以降、低地の開発の進展に伴い、市域は米や麦の生産地としても栄えるようになりました。今日に伝わる民具の大部分が農具であることも、農業都市として発展してきた本市の特徴を傍証するものといえるでしょう。さらに、農間余業として麦わら真田作りや桐細工、木櫛製作などが行われるようになり、現在まで続く本市の伝統工芸につながっていきます。

近代に入っても、本市は交通の要衝としてさらに発展していきます。江戸川には蒸気船通運<sup>つううん</sup>丸が就航し、陸羽街道には千住馬車鉄道<sup>せんじゅばしやてつどう</sup>が運行されました。そして、東武鉄道の開通とともに、牛島のフジが東京近郊の名所として有名になっていきます。一方で、近代以降も、明治43年（1910年）の水害や昭和22年（1947年）のカスリーン台風など、本市は水害に苦しめられてきましたが、煉瓦製樋門<sup>れんがせいひもん</sup>の建設や全国一の規模と謳われた耕地整理、河川改修工事に伴う県内初の土地区画整理事業など様々な対応が図られてきました。平成18年（2006年）に全区間の供用が開始された首都圏外郭放水路<sup>しゅとけんがいかくほうすいろ</sup>は、それら治水事業の集大成といえます。また、1960年代以降の春日部駅西口の開発や武里団地の建設は、それまで田園地帯であった市域の景観を一変させ、市域における低地の開発を象徴するものとなっています。



3-1 縄文時代の貝塚が形成されたムラのイメージ



3-2 近世の宿場と河岸場のイメージ

以上のように、縄文時代の海から現代の河川に至るまで、水辺で人々の生活が営まれてきたことで、本市の歴史文化は育まれてきたことがわかります。このことから、文化遺産の種類や時代をまたいだ本市の歴史文化の総体は、次のとおりまとめることができます。

**歴史文化の総体：海と河川に育まれた郷土、  
水と共存・共生する人々の暮らし**

## 第2節 歴史文化の特徴

前節でまとめた本市の歴史文化の総体に、人々と水との関係性を踏まえると、本市の歴史文化の特徴として、以下のように4つの特徴が導き出されます。

### 1 奥東京湾の恵みと、中川低地の開発を示す 歴史文化

人々が水辺で暮らし、それを上手に活用することで、本市が発展してきたことを示す歴史文化です。

縄文時代の奥東京湾によって、市域では多くの貝塚が形成されました。その後、海が退き、中川低地が形成されると、水辺の恩恵を求めて、人々は長い年月をかけて低地の開発(弥生時代の稲作、中世の荘園、近世の新田開発など)を行ってきました。特に、近世の新田開発により農業が盛んになると、五穀豊穡を願う民俗芸能や、農間余業として桐細工や麦わら真田作りが行われるようになり、これらは現代まで続く本市の文化遺産となっています。



3-3 稲刈りの風景(昭和34年)  
(出典:かすかべデジタル写真館)

### 2 中川低地における水との戦いを示す 歴史文化

低地に立地する本市がこれまでに直面した水害と、人々がそれを克服しようとしてきたことを示す歴史文化です。

水辺で暮らすということは、様々な恩恵が受けられ、本市の発展には欠かすことのできない要素でしたが、明治43年(1910年)や昭和22年(1947年)のカスリーン台風などにみられるように、ひとたび水害が発生すると、大きな被害に直面する可能性もありました。このような水害に対して人々はただ手をこまねいていたわけではなく、それを克服しようとしてきました。市域に残された水害の記録のほか、水塚や樋門、河川の改修工事や首都圏外郭放水路といった大規模な土木工事などは、そのことを示す文化遺産であるといえます。



3-4 流出した木橋(昭和22年)  
(出典:かすかべデジタル写真館)

### 3 日光道中と江戸川を通じた交流を示す 歴史文化

陸路とともに、河川を介して、外部の様々な文化が市域に運び込まれ、それによって本市が発展してきたことを示す歴史文化です。

古来より、石材や土器など、市域には様々なものがもたらされてきました。日光道中や江戸川が整備された近世以降にも、松尾芭蕉や円空など様々な人物や物資が市域を往来し、江戸などとの文化交流が盛んに行われてきました。発掘調査で出土した遺物のほか、近世の古文書や石造物、民俗芸能、伝統産業などの文化遺産は、外部との交流によって本市の歴史文化が育まれてきたことを示すものとなっています。



3-5 河岸場跡と河岸場の石垣

### 4 武蔵と下総の境に立地したことを示す 歴史文化

現在の市域が、かつては武蔵と下総の2つの地域にまたがっていたことを示す歴史文化です。

河川は、外部から文化が流れ込んでくる道として利用されていましたが、その一方で、市域と外部を明確に区分する境界としても機能していました。埼玉県の東端に位置する本市は、武蔵と下総といった2つの地域で製作された円筒埴輪が樹立された内牧塚内古墳群にみられるように、古来より両地域の境界域であり、相互の文化が交錯する結節点となっていました。また、明治8年(1875年)に現在の市域全体が埼玉県域となるまでは、時代ごとに、古利根川や中川(庄内古川)などの河川を境として支配領域や行政区画が移動する環境にありました。なお、現在の千葉県との境界線も、市域東端を流れる江戸川となっています。このように時代ごとに設定された境界は、人々の生活にも大きな影響を与え、地名や伝説、信仰などの文化遺産に、国境といった公的な境界のみならず私的に認識された境界も表徴されています。



3-6 下総と刻まれた石造物

